

業の変化と都市化現象には深い関係があるだろうと考えられる。

たとえば、根岸・台、浜崎・宮戸のような畑作地域で経営耕地規模も小さくなく、比較的精力的に野菜栽培を行ってきた地域においては、多毛作の野菜作りを継続させるため労働力が他の仕事に奪われる事のない貸し家、アパート兼業が多く見られた。そしてその転業資金を得るためにも耕地の売買が進み、宅地化現象が顕著にみられる。農業にとっては耕地の減少・市街化にともなう新たなマイナスの条件が生まれつつある。

それに対して、稲作地域で中規模の耕地をもち、冬は、よしず・竹ぼうき作りの副業をなす農家の多かった下内間木では、農閑期にそれらの副業から土建関係の日雇いへと変えたが、稲作はこれまでどおり維持する事ができた。したがって、下内間木は農業的な色彩が強く残り、都市化の遅れた地域となった。

しかし、同じ稲作地域でも“竹屋”と半農半商の農家をもつ上内間木では経営耕地規模も小さく、したがって農家は採算のとれない農業経営を切り捨て、地価の安い低湿地帯に適する貸工場・貸倉庫業を始めた。したがって上内間木は市街化はおくれているが、零細企業の工場が多く、地域内には、休耕地の増大がめだつ。

これらの結果より農村の内部の条件が現在の地域における都市化現象を大きく性格づけている事がわかった。

福島県夏井川流域の地理学的考察

松 崎 正 子

夏井川は福島県の南東に位置し、県域で太平洋へ流入する河川としては最大の流域面積を有している。本論文は夏井川流域でも、その中で最大の市街地であり、かついわき市の中心地である平を主として取り上げ、自然環境を重視しつつ地誌的にまとめた。

いわきはNW-S Eの走向をもつ多数の断層群により第三紀層が阿武隅山中まで深く入り込んでいるため、福島県の狭小な海岸地帯の中では比較的海拔高度の低い地帯が広く拡がっている。この様に四方を山地と海で囲まれた「いわき」は古来一つの閉鎖的な地域社会をなして来た。そして現在でもそれは同じである。いわきの中では断層地形から北部・南部と二つの地塊に分けられるが、夏井川流域はその北半を占める地塊全域とほぼ一致しており、これは平影響圏、特に平商圈の領域を大きく規定している。夏井川水系は阿武隅山中に発し、山中では断層の影響を受けて、本流や支流好間川はNW-S Eの方向に流れているが、東縁においては著しい先行性流路を呈し、東縁の山麓斜面から現出してくる石城夾炭層帯では河岸段丘が発達しており、なかでも好間川・新川沿いの河岸段丘では明治末から炭鉱の開設に伴い多数の炭鉱集落の立地をみた。夏井川沿いの河岸段丘では、水はけの良好な土地条件から、梨栽培が盛んである。支流好間川や新川は平市街地付近にて本流と合流している。このため主要道路は平を中心に放射状に延びている。この合流付近は平が城下町として発達する上で核となった城跡を残す残丘状の中位段丘を中心に広い平坦面をなしており、平中心市街地は中位段丘

面と南の新川の谷底平野に位置している。平という名もこの地形に由来していると思われる。

平の発展の上で城下町形成の次に大事なのは石炭産業の発達である。平には炭鉱はなかったが、平を取り囲む形で炭鉱が分布していたこと、炭鉱集落においては人口の増加に対し商業活動がきわめて貧弱であったこと、石炭産業によって蓄積された地元資本が大正年間に、平に続々と銀行として現わされたことなどによって、平は産炭地域をヒンターランドとして商業・金融活動を活性化させた。これには平を中心として放射状の道路により平が夏井川流域の交通の結節点となっていたことも見逃せない重大な要因になっている。平から東に広がる海岸平野には旧浜堤が4列認められており、この間夏井川は顕著な自然堤防を形成している。この自然堤防や広い河川敷、旧浜堤では野菜栽培が行われ、砂質地で掘り易いことから特にネギ栽培が盛んである。また海岸付近では米の収穫量が少ないことから養鶏が盛んに行われている。

このように夏井川流域を考察するにあたっては自然条件と人文現象を同じくらい重視して、研究を進めなければならなかった。

福生市の都市化とその地理学的考察

波多野 久仁子

論文構成：第Ⅰ章 自然環境

第Ⅱ章 人文環境

第Ⅲ章 都市化について

私が取扱ったのは、都心から40Kmに位置する福生市の、主としてその都市化についてであるが、それは人口の増加を基本として、商業活動、工業生産活動の伸び、農業の衰退等で実証的に明らかにされた。又、福生市の都市化を促進させた歴史的な背景を探ると、過去においては西多摩の物資の集散地であった事、戦前の陸軍飛行場、さらには、戦後の横田基地等が、存在したことであった。福生市を論ずる場合、東京大都市圏における位置も見逃せない事実となってくるが、福生市は厳密に言うと、区部へのベッドタウンではない。区部に対する通勤、通学依存度から多摩地域をみると、35Km圏で分割して考えられ、福生市の場合、立川市や八王子市をはじめとする周辺部中心地への通勤通学者の住宅地として位置づけられる。しかし、経済の成長と、所得水準の上昇、ならびに教育程度の上昇に対応して、区部への依存度が、高まり、区部へのベッドタウンになる日も近いものと予想される。この論文を書いた目的は、東京大都市圏の中にあり、伝統的地場産業を持たず、市域面積も小さい福生という町が、第2次世界大戦後、米軍横田基地が建設されたことにより、農地を宅地転換へと進め、又商業面においても変化を与え、基地が、就職難の時代においても多くの就業機会を与え、それが戦後の福生に一種の活力を与え、日本経済の成長を背景とし東京大都市圏の中に組み込まれるようになり、しだいに基地経済からの脱皮を目指すようになったその歴史的な発展と今後の発展方向を明らかにすることであった。